

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

秋

2023

第3号

青いスピズ

作品募集・入選作品

「金太の花」 おぎなお紺

佐藤まどか

椰月美智子

永井玲衣

遠藤秀紀

伊藤ハムスター



君を知っている

佐藤まどか 絵・あわい



青いスピンの 目次

- 1 創作「君を知っている」 佐藤まどか
- 9 創作「新しい今」 椰月美智子
- 16 作品募集・入選作品「金太の花」 おぎなお紺 永井玲衣
- 22 エッセー『てつがく』してみませんか
- 25 科学エッセー「真実を見つける楽しみ」 遠藤秀紀
- 28 イラストエッセー「学校あるある」 伊藤ハムスター
- 30 コラム「目で読むSDGs図鑑」
- 32 コラム「世界の友だちの一日」

「スピン」って、何だか知っていますか？
本に付いている細いリボン、
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、
ページにそつとスピンをはさんでおけば、
またいつでも、
その本の世界にもどることが出来ます。

そして、「青」は、
青春や青空をイメージさせる色。
これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、
物語からノンフィクション、イラストエッセーまで
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、
あなただけの新しい世界を見つけてください。

転入生の名は五十嵐翔。

だれかが「芸能人みたい。」と言うと、みんな一斉に笑った。

「翔」というのは人気の名前だからよく聞くけど、「五十嵐翔」は本当に響きがよい。

新学期に合わせて大阪から転入する予定だったが、事情で二週間遅れた。

そう説明したのは先生だ。当の本人はずっとうつむいたままで、最後に「よろしくお願いします。」とだけ、つぶやくように言った。

「大阪のわりには、めっちゃ暗いやつだなあ。」と、後ろの席から聞こえてきた。

ざわざわしたカラフルな教室で、五十嵐くんのところだけが白黒みたい。空いていたとなりの席がやっと埋まるから楽しみにしていたけど、話せるかどうか自信がなくなってきた。

五十嵐くんは黙ったまま、となりの席に座った。

ちらつと横を見たら、目が合ってしまった。

長い前髪の奥に隠れたこの目、だれかに似ているような気がする。

とりあえず、「大島友梨奈です。」と、あいさつしておいた。

「五十嵐です。」

小さな声が返ってきた。

昼休みになっても、転入生はだれとも話さない。

私は絵里と窓際に行くと、そんな五十嵐くんを遠目にちらちらと見る。

「ねえねえ、おとなりさんと話せた？」

「ううん、あいさつだけ。さっきからずっと本を読んでいるよ。」

「友梨奈、けっこう楽しみにしていたのにね。」

「まあ、ただの人見知りかもしれないけど。」

それから数日たっても、五十嵐くんはだれともしやべらず、いつも本を読んでいる。でも、読書好きというだけで、仲間という気がしてくる。私と絵里も読書が好きだ。感想を言い合うのが楽しい。

みんなは、五十嵐くんのことを暗いとか社交性がないとか言うけど、席で目が合うと少し頭を下げてあいさつしてくれるし、静かに読書をしていて、平和でいいと思う。

同じ翔くんでもえらい違いだと、急にあいつのことを思い出した。

小学校三年生のときのクラスに、すごくいやな翔くんがいた。

自称テニス焼けをしていて、おしゃれで、勉強もできて、いつもいばっていた。掃除当番のときも自分だけやらず、人を奴隷のようにこき使っていた。私も「うざい。」とか「きもい。」とか「働け！」とか言われていた。

何だっけなあ、あいつの名字。あ、思い出した。笠井だ。

その日の夕方、私は頼まれていたものを買いにスーパーへ行った。母が仕事帰りに行くと、タイムセールが終わってしまうのだ。

魚売り場で、五十嵐くんを見かけた。金目鯛のお頭が三つ入ったパックをじっと見ているみたいだった。私は、本日の目玉商品のそれを買いに来たのだ。

彼も金目鯛をねらっているのかな？ 何も陣取らなくてもいいと思うけど。

店員さんがタイムセールシールのシールを貼り始め、金目鯛のほうに近づいてきた。

「すみません、前を失礼します。」

店員さんにそう言われても五十嵐くんは一ミリも動かないから、私はおせっかいをする。

「ねえ、じゃまみたいだよ。」

五十嵐くんの腕を軽くたたくと、彼はひえっ！ と声を上げて、ホラー映画でも見るような目でこっちを見た。

「そんなにびっくりしなくても。もしかして、金目鯛に恨みでもあるの？」

ちよつと彼をからかいながら、パックにシールが貼られるのを待っていると、おばさんたちが突進してきて、私は押しつけられてしまった。

「ああっ、金目鯛が！」と、思わず叫んだ。

すると五十嵐くんが、群がるおばさんたちの隙間から、シール付きの金目鯛を一パック取って、私に渡してくれた。その間ずっと無言だった。

「ありがとう！ じゃ学校で！」

ほかの買い物を済ませ、レジに行く。

振り向くと、トイレトペーパーのパックだけを持った五十嵐くんが私の後ろに並んだ。

「あれ、金目鯛は買わなくていいの？」

もしかして、私に一パックくれたせいで、自分の分はもうなかったのかもしれない。

「いや、目が怖いから。」

意外な返事に驚いた。その気持ちはちよつと分かるけどね。

「怖いなら、何でじっと見つめていたの？」

「いや、見つめていたのではなくて、にらまれて動けなくなっていた。」

私は思わずプツと笑った。個性的な人だな。

かごの中の物をマイバッグに入れていると、会計を済ませた五十嵐くんが寄ってきた。

「あとう、大島さん、実は……。」

五十嵐くんが、もじもじしている。

「あの、ぼくは……君のことを知っているんだけど……君はぼくのこと、分からない？ どきつとした。私のことを知っている？」

「うん、その目っていうかまつ毛、どっかで見たことがある気もするんだけど。」

五十嵐くんが眉間にぎゅつとしわを寄せた。

「ぼく、前は、その、笠井という名字だったんだ。」

急に五十嵐くんが頭を深々と下げた。

「え、笠井？ 笠井って、あの笠井翔？ うっそー！」

私は大声を出していた。

肉付きのよい日焼け男で、自信たっぷり、えらそうだったあの笠井くんが、今はひよろひよろと背が高く、青白くて、自信なさげだ。分かるわけがない！

「まるで別人じゃん！信じられない。そうか、あの笠井くんなのか。何となく、目がだれかに似ていると思ったら。よくきもい、うざいって言われたの覚えてるよ。それに、いつも掃除当番をサボって、私たち女子にやらせていたでしょ？」

五十嵐くんは頭を下げてままだ。

おばさんたちが、同情した目つきで五十嵐くんを見てから、責めるように私をにらむ。

さつき私を押しつけておいて、善人ぶらないでください。

上体を起こした五十嵐くんは、血が上ってしまったらしく、顔が真っ赤になっていた。

「大島さんにいっばれるかと思って、びくびくしていたんだ。でも、いつかはばれちゃうだろうから、もう自首しました。」

自首って……。

「そっちは、ただからかって遊んでいたつもりかもしれないけど、私はあの頃、家族のことであたいへんだったのに、学校でも居心地悪くて、毎日つらかったんだよ。」

ああ、これ、ずっと言いたかったこと。

でも、四年生でクラス替えがあり、笠井くんを学校で見かけなくなった。転校したといううわさも聞いた。まあ、あの頃の私に文句を言う勇気はなかったけれど。家族のことが落ち着いて、学校が楽しくなって、中学では親友もできて、自分に自信がついた。だから、今は言えたのだと思う。

「ごめん。あれからいろいろあって、自分がしたことをすごく反省した。」

そう素直に謝られると、拍子抜けしてしまう。

「あのえらそうな人が、四年間でこんなに謙虚な人になったの？どっちがほんど？」

笠井、いや五十嵐くんは、くちびるをぎゅっとかんで目を伏せた。

目の前の人があの笠井くんなのか疑いたくなるけど、このやたらに濃くて長いまつ毛は、確かに記憶に残っている。

「どっちもぼくだけど……あの頃は、女子をからかって自分のストレスを解消していた。本当に、本当にすみませんでした。」

そのあと、スーパーの前で立ち話をした。

五十嵐くんの話によると、四年生のときに肘を痛めて以来、テニスはもちろんスポーツはやめた。両親が離婚して名字が変わり、前に住んでいた家にお母さんと二人で戻ってくるようになったが、いろいろな事情があって、引っ越すのが遅くなってしまったらしい。

「前の家に戻れてほっとしているけど、みんなに身元がばれるのは怖い。」

いつも憂鬱そうな五十嵐くんが、ますます憂鬱そうな表情でそう言った。

「二年A組であの頃のクラスメートっていうと、横川さんと笹塚くんだけかな。班が違ったから、掃除の奴隷にはなっていないかったけどね。でも、ほかのクラスの子にも、いずればれるんじゃない？」

「だよね……どうしよう。」

「きもい、うざいはまだしも、掃除で悔しかったことは、そう簡単には忘れられないかも。」
本音を言った。

「分かるよ。実はぼくも大阪の学校で……。」

ああ、そういうことなのか。

「それでやっと、やられる側の気持ちがあったってわけね。」

五十嵐くんが大きなため息をつくから、私もつられてため息をついた。

まるで、私が五十嵐くんをいじめているみたいなきがしてきた。

「もういいよ。自首してきたし、時効成立！でもさ、びくびくしているより、みんなにも白状して

ちゃんと謝ったほうが、五十嵐くんにとってもみんなにとっても、いいんじゃないかな。それに、毎

日憂鬱そうだと、こっちまで憂鬱になっちゃう。となりの席なんだし、たまには笑ってよ。」

五十嵐くんは泣きそうな顔になって、うなずいた。

「うん、分かった。」

作り笑いをした五十嵐くんの顔がおかしくて、私は爆笑してしまった。

五十嵐くんも笑った。

今度は本当の笑顔だった。

佐藤まどか 作家。イタリア在住。著書に「二〇五度」、「アドリブ」、「スネークダンス」などがある。



新しい今

やづきみちこ
椰月美智子 絵・田中海帆

グループワークをした余韻もあって、教室内は騒がしい。後ろの席に陣取っている目立ちたがり屋の男子三人トリオが大きな声で笑って、みんなをあおっている。理科の先生はゆるいから、調子に乗っているのだろう。律哉は、ふうつと息を一つ吐き出してから立ち上がった。

「おい、静かにしろよ。先生の声が聞こえないだろ。」声を張ると、三人トリオの中心である翔太が律哉に目を向けて、「悪い悪い。」と手刀を切った。翔太が黙ると、ほかの二人も静かになった。先生が、助かったよ、みたいな笑顔をよこす。教室内は落ち着きを取り戻し、その後、理科の授業は滞りなく進んだ。

中学デビューした翔太は、小学生の頃とはだいぶ変わってしまったが、どういうわけか律哉を慕ってくれる。翔太に限らず、ちよつととんがった生徒たちも、「律哉が言うなら。」と一目置いてくれる。

律哉は小さい頃から優等生だった。勉強も苦じゃなかったし、スポーツも得意だ。先生からの覚えもめでたく、親に反抗するという気持ちも湧かず、うるさいこと

「ああ、あれかあ。」

「今、出せる？」

律哉がたずねると、谷岡は首を振った。

「おれ、好きな戦国武将なんていないから。」

「は？」

「いないから出せない。縄文時代だったらいいんだけどなあ。」

そう言って、シャープペンに芯を入れる作業を始める。

「谷岡は、縄文時代の歴史上の人物を知ってるのか？」

「いや、知らない。でもさ、戦国時代の武将より、縄文土器を作った人のほうがすくなくない？」

「縄文時代の人物の記録や文献はないだろ？」

律哉が質問すると、「あーあ。」と情けない声を出した。

シャープペンの芯が一本折れたらしい。

「ん、文献？ そんなのあってもなくても関係ないよ。いいよなあ、縄文時代。平和だし、身分制度もないしさ。あこがれる。」

律哉は、谷岡に気づかれないうように細く息を吐き出し

を言われても、まあ一理あるな、と思うタイプだ。小学生の頃からずっと学級委員だったし、中学二年の後期からは生徒会長に任命され、今に至る。サッカー部では部長だった。

先生や親が自分に期待しているのも知っているし、友達からの信頼が厚いことも自覚している。あらゆる場面で、みんながどういう気持ちでいるかも瞬時に理解できるし、そのときに自分がどう言えればいいか、どう振る舞えば正解なのかも自然と分かる。

律哉自身、そんな自分を持って余しているかというところ、そんなことはなく、何事もスムーズに事が運ぶのでかなり満足している。

「谷岡、ちよつといいか。社会のレポート出でないの、谷岡だけなんだけど。」

教科ごとに係が決まっていて、律哉は社会科係だ。先週の宿題だった、自分の好きな戦国時代の武将についてまとめるというレポートを、谷岡だけが出していない。

た。

「オーケー。じゃあ、レポートは出さないってことでいいんだな。」

「いいよ。」

谷岡悠。三年で初めて同じクラスになった。顔は見たことはあったけれど、話したことはなかった。谷岡は、何というのか全くつかめない生徒だ。社会科のレポートだって、好きな戦国武将がいないからって、提出しないなんてありえない。実際、律哉だって、武田信玄のことなんて特に好きなわけではない。会ったことも話したこともないんだから、あたりまえだ。

中学生最後の夏休みはあつという間に終わって、これからは受験一色となる。中三の内申書がだいじなのは、みんな十分に分かっている。これまで課題をサボって提出しなかった連中も、今は進学のために必死だ。それなのに、谷岡だけは変わらない。お気楽というか、危機感がないというか、社会性がなさすぎるというか……。

谷岡は決して勉強ができるわけではないし、運動が得

意という印象もない。クラスでは目立つこともなく、か
とって大人しいわけでも暗いわけでもない。ひょうひよ
うとしているけど、変わり者というわけでもない（変わ
り者はほかにもいる）。はつきりいって、ふつうだ。
ふつうのクラスメートは、律哉にとって最も話を通じ
やすい。律哉の意見に何でも賛成してくれて、さらには
ありがたがってくれるから、大いに助かっている。
けれど、谷岡だけはちよつと違う。律哉はたいてい誰
のことも好きだが、ひそかにこのクラスメートだけは苦
手なのだった。

体育の授業は持久走。男子はグラウンドを十周、三キ
ロを走る。律哉は、短距離は好きだが長距離があまり得
意ではない。今日は十七人中、五位以内を目指したい。

「ようい、スタート。」
先生が笛を吹いて、一斉に走りだす。陸上部の光喜と
バスケット部の綾斗がトップだ。三番手は翔太。律哉は
今のところ、七番手につけている。このままのペースで

光が、閉じたまぶたに降り注ぐ。息が苦しい。体中の毛
穴から汗が噴き出す。体操着はぐつしよりとぬれている。
次々と、苦しそうな顔がゴールしていく。律哉は息を
整えて体育座りになり、クラスメートたちに拍手を送った。

「……あれ？」
思わずつぶやいた。谷岡が今、ゴールしたのだ。順位
はおそらく後ろのほうだろう。ずいぶん遅い。みんなが
息を切らしている中、谷岡だけはさわやかな表情だ。ゴー
ル後、座り込むこともなく、立ったまま顔を空に向けて、
気持ちよさそうに風に吹かれている。

最下位の生徒が息も絶え絶えにゴールして、みんなか
ら大きな拍手で迎えられた。最終周はほとんど歩いてい
たけど、汗だくで必死にゴールを目指す姿はちよつと感
動的だった。

授業が終わり教室に戻ろうとしたとき、谷岡が先生に
呼ばれた。律哉は気になって、近くで様子を見ながうこ
とにした。

「谷岡、二年のときよりタイムが落ちてるじゃないか。」

行けば最終周でスパートがかけられる、と頭の中で算段
しながら先頭集団についていった。

光喜と綾斗はペースを落とすことなく一位と二位を維
持しながら、四周目で最下位の生徒を一周分追い越した。
あと三周。ふくらはぎの筋肉がちぎれそうだった。サッカー
部を夏休み前に引退してからは、走り込むこともなくなっ
ていた。努力を惜しんだ自分をだらしないと律哉は思う。
前にいた翔太が順位を落とし、後方に流れていく。ラス
ト二周。

そのとき、後ろから誰かが来て律哉に並んだ。谷岡悠
だった。涼しげな顔をして足を繰り出している。そうい
えば谷岡は持久走が得意だったと、ふいに思い出した瞬
間、こいつにだけは負けたくないと思った。律哉は、渾
身の力でスパートをかけた。谷岡の姿が視界から消える。
律哉は最後の力を振り絞ってゴールした。ゴール前で
並んだ生徒と同時にゴールだったが、僅差で律哉が四位に
なった。

そのままサッと倒れ込んで、天を仰ぐ。秋の太陽の
本気で走ったか？ まだまだ余裕があったように見えた
けど、どうだ。」
先生の口調が厳しい。谷岡は何か考えているような顔だ。

「……はい。本気で走りました。」
そう答える谷岡を、先生が不審そうな顔で見る。律哉
から見ても、谷岡が本気で走ったようには思えなかった。
「最大の努力はしたか？ みんな、倒れ込んでゴール
してたぞ。」

先生が質問を続ける。谷岡は顔をかしげて、また何か
を考えるようなそぶりを見せた。
「倒れ込んでゴールするってことが、最大の努力とい
うことですか？」

きよとした顔で、谷岡が質問を返す。おちよくつ
ているというわけではなく、先生の言っている意味が本
気で分からないようだった。
「みんなそれほどに、懸命に自分の実力を出したってこ
とだ。お前は実力を出しきったか？」

しばらくの沈黙の後、谷岡は、「今日の自分の実力を

出しました。」と言った。先生は、そうかと小さくうなずき、二人の話はこれで終わりとなった。

律哉は、何だかいらついていた。谷岡が意味不明だからだ。天然を気取っているのか、それともがんばるのは愚かだという、今どきの風潮をまねした浅はかな考えの持ち主なのか。どちらにせよ、おもしろくなかった。先生の質問をのらりくらりとかわして、自分は間違っていないという態度が鼻についた。

最後の生徒会集会。十月からは、二年生が中心となって生徒会活動をしていく。現生徒会長の律哉は、大取りを任された。最後だから、きっちり締めたい。

まずは、一年間の活動に協力してくれたお礼と、律哉が指揮を執って改善した校内ルールなどについてしゃべった。この後は、今後の抱負を述べて終わりにする。

「ぼくたち三年生にとって、中学校生活も残すところ、あと半年となりました。来週は中学校最後の運動会があり、来月は最後の文化祭があります。最終学年として残り

なぜこんなやつに感想を聞いてしまうのか、律哉自身全く分からなかった。

谷岡はぼかんとした後、律哉を見て、

「最後、最後って言ってたね。」

と言った。

「そりゃ、そうだろ。おれたちはもう最終学年だから。先生たちもよく言ってるし。」

「最後じゃなくて、新しい、だよ。」

「はあ？」

谷岡が何を言っているのか理解できず、一瞬パニクる。「新しい運動会に、新しい文化祭だよ。これから経験することは、みんな新しい。」

「どういうこと？」

「だって、こうして話してる今も、新しい経験でしょ。同じことなんて一つもないよ。時間はいつでも新しいから、どんな瞬間も全部初めてで、新しい。」
そう言って、行ってしまった。

された日々を、下級生たちの手本となるよう、勉強にスポーツに励んでいきます。そして、その先に待っている高校受験に向けて、努力に努力を重ね、自分の力を出しきって、自信を持って臨むことをここで約束します。義務教育課程最後である中学生でいられるのも時間の問題です。カウントダウンはもう始まっています。ぼくたちは三年生は、今後の行事全てに、『中学生最後』が付きますが、だからこそ悔いのないよう、一日一日を精いっぱいがんばりたいです！」

大きな声で言う、いいぞ、とやじが飛んできた。きつと翔太あたりだろう。

「これまで、本当にどうもありがとうございました！」

深々と頭を下げると、大きな拍手が届いた。生徒会長として、きれいにまとめられた。

教室に戻るとき、ちょうど体育館のトイレから出てきたやつがいた。谷岡だった。

「どうだった？ おれの挨拶。」

思わず口から出ていた。そんな質問をした自分に驚く。

「何だよ、それ！」

谷岡に向かって、律哉は叫んだ。谷岡は、聞こえていないのか、スルーしているのか、振り向かず歩いている。

「くそつ。」

何が新しいだ。何が初めてだ。あいつはぼかなのか。どう考えても自分のほうが論理的じゃないか。それなのに、なぜか大きな失敗をしでかしたような気持ちになっている。律哉は、自分をそんな気持ちにさせた谷岡がひどく憎たらしかった。

小さくなっていく谷岡の後ろ姿を見つめながら、唇をかむ。

「……新しい今。」

谷岡が消えていった渡り廊下の先を見据え、律哉はつぶやいた。思わず床を蹴ると、うわばきの底がキュツ、と音を立てた。
やっぱり、あいつのことは好きじゃない。

金太の花

おぎなお紺
絵・中田いくみ



「金太、おい、金太。」

呼びながら、何度も体にふれる。そのたびに、金魚の金太はびくびくと背びれをゆらし、苦しそうに口を動かした。だけど、またすぐに動かなくなる。

もうだめだ……。

やがて、金太は、びくりとも動かなくなってしまった。昨日、お母さんにしかられて、久しぶりに水槽を洗った。ガラス面にこけが生え、ポンプもぬるぬるになっていた。いた。

でも僕は、友達との約束があったから、丁寧になんか洗わなかった。ちゃちゃっとやって、それでおしまい。そしたら、今朝、金太は水槽のいちばん上でぶかぶか横になって浮かんでいた。

あっと思って調べたら、水槽に空気を送るポンプのスイッチが切れたままになっていた。洗った後で、入れるのを忘れてたんだ。

あわててスイッチを入れたけど、もう、手遅れだった。

「あーあ。しんじやった。」

弟の優介が、水槽をのぞいてつぶやいた。優介はまだ小さいから、たぶん、死ぬってことが分かってない。

「すてる？」

「捨てねえよ！」

分かっていても、能天気な優介の言葉にかちんとくる。

「おにいちやんが、おこったあ。」

優介はべそをかきながら、キッチンへ走っていく。

ちえつ。

「お墓、作ってあげようね。」

お母さんが、優介と話している声が聞こえる。

「おはか、おはか。」

何だか楽しそうな優介に腹を立てながら、僕はのろのろと動きだす。

庭に穴をほり、金太を土の上に置いた。

何だかとても苦しそうな顔に見える。

そうだよな。息ができなくて死んだんだもん。ごめん

金太。

心の中で謝りながら、ゆっくり土をかけていく。優介

がじょうろを持ってきて、金太のお墓に水をやり始めた。

「おおきくなあれ、おおきくなあれ。」

「花の種じゃないの。金太は死んだの。」

僕が言っても、優介はやめない。

「おおきくなあれ、おおきくなあれ。」

優介の歌うような声が、庭に響いた。

そして。

次の日、本当に芽が出ていた。

まさか。偶然だ。そのへんの雑草の芽が出たに決まってる。

「きんたのおはな、おおきくなあれ。」

優介が、また水をやる。

どうしよう。本当に金太の花が咲いたりしたら。畑のトマトみたいに、金太がたくさんなったりしたら。

のんびりした優介の声とは反対に、僕は動けなくなる。

その日から、金太のお墓の芽は、ぐいぐいと大きくなった。小さかった葉が地をほうのように何枚も広がり、その

中央の細い茎が、少しずつ背をのぼしていく。

やがて、茎の先がぷっくりとふくらみ、ほんのりとオレンジ色になってきた。

金太の花のつぼみ。

もし本当に金太が出てきたら……。

苦しうに口をぱくぱくしていた金太。黒い目が半分くさったみたいに白くなっていた金太。最後は、ただ横になって、ただようだけだった金太。

僕をうらんでいるだろう。おまえのせいだって、怒っているだろう。金太の花が咲いたら、きっと僕をにらむだろう。もしかしたら、呪いの言葉を吐くかもしれない。

「おおきくなあれ。おおきくなあれ。」

優介が、楽しそうに水をやる。

「……やめろよ。」

「いやだ。」

「やめろってば。」

僕は、優介のじょうろをうばい取って放り投げると、庭から飛び出した。

金太は、一年前のお祭りですくった金魚だ。

とてもかしこくて、えさの準備をしていると、僕のそばへ寄ってきた。お父さんやお母さんがえさをやっても知らんぷりだったのに、僕のとぎだけそばに来た。スナック菓子をやったら、一度口に入れてぺっと出す、味の分かる金魚だった。

お父さんにねだってポンプ付きの水槽を買ってもらった。最初は水槽を洗うのが楽しかったのに、だんだんめんどくさくなった。重いし、冬は冷たいし。そのうち、ふんが水中に浮いていても、ガラス面にこけが生えても、気にならなくなっていった。

死んだのは、たかだか金魚じゃないか。お父さんやお母さんが死ぬのとはちがう。犬や猫が死ぬのともちがう。もっと小さい生き物。

たかが金魚。

お父さんやお母さんだつて、虫を殺す。蚊とかゴキブリとか。パチンといとも簡単に。

それと同じでいいじゃないか。僕が殺してしまったのは、たかが金魚だ。それも、殺そうと思ってやったんじゃない。ミスだ。

そう思っているのに、金太の花が大きくなるにつれて、僕は苦しくなっていた。金太の花が咲くのが、怖くてたまらない。

気がつけば、神社の前にいた。そういえば、明日がお祭りだ。

広い参道には、木の枝を刈る人やそうじをする人、屋台を組み立てる人など、準備をしている人がたくさんいた。

僕は去年、ここで金太と出会った。

行くあてがあるわけではなかったけれど、とぼとぼと参道を進んだ。まだ何屋なのか分からないむき出しの屋台が、いくつも並ぶ。明日に向けて、神社全体がわくわくと活気づいているような気がして、僕はうつむきがちに歩いた。

木の幹に、大きな水色の水槽が立てかけてあるのが見

えた。

あれは、金魚すくいの水槽だ。

僕は足を止めた。それから、ゆっくり水槽へと近づいていく。

「おい、ぼうず。祭りは明日だぞ。」

屋台を組み立てているおじさんが、声をかけてきた。

僕はそのまま水槽の前に座りこんだ。

「おいおい、いくら待っても、明日まで金魚は届かんぞ。

のら猫に食われちまうからな。」

僕は、ゆっくりとおじさんに顔を向けた。

「ねえ、金魚屋さん。金魚は、猫に食われて死ぬの人間に殺されるのと、どっちが不幸？」

おじさんは、「へ？」という顔をしたまま、僕をじつと見つめた。それから、持っていたドライバーを作りかけの屋台の上に置くと、小さいすを持ってきて、僕のとなりに腰かけた。

「そんな難しい質問、もう少し、くわしく聞かなきゃ分かんねえなあ。」

僕の顔をのぞきこむおじさんの目が優しく、僕は金太のことをぼろりと話した。

ほんの少しのつもりだったのに、話し始めたら、心につかえていたものが全部出るまで、止めることができなかった。

「ううん。」

おじさんは、頭をかきながら、ため息ともうなり声ともとれる声を出した。

「そうだなあ。おれはこれが仕事だし、下手すりゃ、一日何十ぴきも金魚を死なせてしまうこともある。」

けどなあ、と言いながら、おじさんはゆっくりと腕を組んだ。

「金魚に悪いなあとか、損したなあとかは思うけど、苦しいと思つたことはない。それは、金魚が、おれにとつては仕事道具だからだ。」

僕は、ひざをかかえたまま、おじさんの言葉を待った。

「おまえさんが苦しいのは、金太がおまえさんにとって友達だったからじゃないのかい？」

「友達？」

「そうだ。名前を付けて、話しかけて、仲良くしてたんじゃないのかい？」

それはそうだけど。でも、相手は金魚だ。

僕が口ごもっているとおじさんは続けた。

「たかが金魚でも、友達は友達だろ。金太という一ぴきの友達。友達を自分のミスで死なせてしまったんだ。そりゃ苦しくて当然だよ。」

ああそうか。

僕は金魚を死なせてしまったんじゃない。「金太」を死なせてしまったんだ。

「そういうときは、ああだこうだと理屈をこね回したりしないで、悲しい、くやしい、申し訳ないと泣いたらいいんだ。」

おじさんはそう言って、僕の頭をくしゃつとなでた。

そしたら、じわりと涙が出てきた。

「金太ごめん。」

小さくつぶやく。

「金太ごめん。」

ずつと心の中でしか言えなかった言葉が、口から出てきた。口から出たからつて、死んだ金太に届くわけじゃない。でも、口に出さなくちゃいけない言葉だったような気がして、僕は何度も金太に謝った。

家に帰ると、優介が水をやっていて。

「ちよつと貸して。」

僕も、金太の花に水をやる。

たとえ、金太の花が咲いて呪いの言葉を吐いたって、僕はきちんと受け止める。たかが金魚なんて言葉で、もう逃げたりはしない。

「おはな、さく？」

優介が、そばに寄ってきた。

「そうだな。咲くといいな。」

オレンジのつぼみが、そつとゆれた。

「てつがく」してみませんか

ながいれい
永井玲衣

「てつがく」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。聞いたことがない？ 何かで見た？ 何か難かしい？ 確かに「てつがく」は「哲学」という字を書きます。いかにも難しそうに見える目です。でもきつと、あなたも気に入るはずですよ。だって、あなたがふだん、気づかないうちに行っているような営みだからです。

「何だろうか」と不思議に思うことはありませんか。言葉にならない「もやもや」に、自分の心がおそわれるような瞬間はありませんか。そんな「不思議」を前にしていちど足を止めて、ぐるぐる考えること。これを「哲学」といいます。

あなたが考え込んでいるとき、大体的場合独りきりでいることが多いと思います。私もそうでした。友達とドッジボールをしているとき、急に「何で自分は自分なんだろう。」という「不思議」がおそってきて、手が止まってしまふ。眠ろうと布団に入った瞬間、「宇宙の果てはどんなだろう。」という「不思議」がやってきて、眠れなくなってしまう。周りの大人や友達は、あなたが考え込んでいる間、どうしたんだろうという顔でこちらを見えています。自分の「不思議」は誰かと共有することはできないんじゃないか、とさえ思ってしまう日もあります。

「哲学対話」という時間は、独りきりではなく、誰かといっしょに「不思議」を考える場です。ええっ？ そんなことできるの、とあなたは思ったかもしれません。意外におもしろいものなんですよ。

哲学対話は、教室や会社、どこかのグループに入り込んですることもあれば、カフェや本屋、公園、音楽ライブ会場などで、その場が集まった、はじめましての人たちと哲学することもあります。

私は集まった人たちから、「不思議」を聞き取る時間が好きです。「愛とは何か。」「なぜ生きるのか。」「そんないかにも哲学らしい「不思議」もだいじですが、そこにいる人たちは、それぞれの生活に根差した「不思議」を持っているはずですよ。それはどんなものかを知りたいと思ってしまいます。あなたにもきつと「不思議」はありますよね。「今、ここ」からの、その人だからこそ出てくるような哲学。私はそれを「手のひらサイズの哲学」と呼んでいます。

「不思議」を出し合う時間になると、大人たちは困ってしまいます。それに対して、子供は「不思議」がどんどん出てきます。ですが、大人も子供も、ぼろぼろと口からこぼれる「不思議」は、どれも変な形をしていて、小さくて、おもしろいのです。

「何で友達と自分を比べちゃうんだろう。」「正しいことって悪いことなのかな。」「スポーツをしているんですけど言ったら、いいですねって言われがちなんですけど、何でそれがいいことみたいにされてるんだろう。」「天気って何で変わるんだろう。」「何で、何でって思うんだろう。」

誰かの「不思議」が、別の誰かの「不思議」を引き連れます。友達の「不思議」を聞いて、初めて思いつくことがあるでしょう。考えてしまうことがあるでしょう。そういえば自分はこんなことが気になっていたのだと、発見するような気持ちがあるはずですよ。

あるいはこんなこともあります。誰かが「自分の家の庭に雑草が生えてくる」という話をしました。わざわざ初対面の人と集まって、そんなことを聞いて何の意味があるんだと、言われそうな話かもしれませんが、でも、じっくりと聞きます。哲学の種が落ちていないか、ゆっくりと探すのです。「でも思えば、

何で雑草を抜こうとしちゃうんだろう。」その一言をきっかけに、その人の日常が「不思議」になりました。そうして、そこにいる人たちが一斉に考えだすのです。対話を始めるというよりも、始まってしまおう、と言ったほうがいいでしょうか。

雑草を抜くことはあたりまえだと思われています。でも、よくよく考えてみれば不思議ではないですか。そもそも雑草って何なのでしょう。なぜ抜く必要があるのでしょうか。

人々の言葉が重なり、対話はゆらゆらとゆらぎながら、進んでいきます。何か分かりやすい答えを見つけるといよりは、分かったつもりで本当は分かっていることに向き合うような体験です。

落ち葉が静かに重なるように、言葉が積み上がっていき、私たちはそこに深く潜っていきます。庭に雑草が生えてしまうという誰かのつぶやきが、気がつけば「私たちはなぜ、気に入らないものを、あっちへやろうとしてしまうんだろう。」という「不思議」に育ちます。

あなたの「不思議」をぜひ教えてください。あなただけの宝物のような「不思議」は、誰かと考えることで、もっと輝くかもしれません。

永井玲衣 哲学研究者。学校や美術館などで哲学対話を行っている。著書に「水中の哲学者たち」などがある。

絵・尾柳佳枝

科学エッセー

真実を見つける楽しみ

遠藤秀紀

「木星の『月』噴火中」

その頃、私は中学生でした。ある日、何気なく家の郵便受けから引っぱり出した新聞に、こんな見出しが躍っていました。掲載されていたのは、まるで雨傘のような形に物質を噴き上げている木星の衛星イオの写真。地球以外の天体で、実際に火山が「噴火」していることを示す初めての観測結果でした。その後も宇宙探査機から送られてくる魅力いっぱいの写真は、「土星のリングはレコード盤」、「天王星 ピンクのかすみ」といった見出しとともに、私の心をとらえて放しませんでした。一九六五年生まれの私は、昨日まで誰も知らなかった太陽系の姿が発見されていく時代に居合わせ、宇宙を知る喜びを学校の友達と分かち合うことができました。

私たち人間は絶えず発見を続けてきました。地球が太陽の周りを回っているという地動説を、学者が説得力をもって唱えたのは、四百年少し前から。生き物は進化し、ヒトはサル仲間から生まれてきたということが信じられるようになったのは、百五十年前のことです。九十年前には、ほとんどの人たちは、大陸が移動しているということを信じられませんでした。大きな隕石が地球に衝突したことが恐竜絶滅の一因であるという説が証拠とともに登場するのは、四十年ほど前の、私が高校生のときのことです。

次から次へと発見を積み重ねてきた私たち。宇宙、地球、生き物、そして自分たち人間自身について、未知の真実を見つけ出し、古い考えが誤っていることを指摘し、謎を解き明かしながら新しい理論を築いてきたことが分かります。この営みこそ、まさに「科学」です。私たち人間は、科学という、真実を探る熱意と楽しみを、心に携えた存在なのです。

みなさんは、図鑑を見て、本を読んで、授業を受けて、友達と議論をして、宇宙や自然や人間のことを知ろうと思えます。その気持ちを「好奇心」といいます。好奇心こそ、科学の原動力です。好奇心に導かれて「知る」ことに挑戦していけば、もうみなさんは科学者の仲間入りをしています。難しい理屈や細かい知識は、いずれ必要な場面で学んでいけばいいのです。それよりも、今、目の前にある事柄について、本当のことを探りたいと思ううきうきした気持ち、「好奇心」を大きく膨らませてほしいと願います。

科学の成果は私たちの知識と考え方を増やし、文化を育てます。たとえばヒトがサルから進化したことを知った人間は、自分たちをそれまでよりもちっけな弱い存在だと感じるように変わったと思います。それが、科学がもたらす文化の豊かさです。

困ったことに、世の中に「科学は人の役に立ち、暮らしを便利にし、国を富ませ、社会のお金を動かす」という、ひどい勘違いがはびこっています。技術や機械や道具は、確かに人の役に立つでしょう。でも科学それ自体は、好奇心をもって人間や自然や宇宙を知ることへの挑戦であって、便利な生活やお金を動かす社会を実現することとは違います。恐竜の絶滅の原因が新しく見つかったところで、国は富みません。地球を中心に宇宙が回転していることを否定したところで、会社がもうかるわけはありません。木星の衛星が煙を上げていようが、暮らしの便利さに変わりはないのです。

科学は、そんなことのためにあるわけではありません。科学とは、謎を掘り下げ、証拠を探し、口から泡を飛ばして議論して、説得力のある新しい理屈に近づいていくことです。そして、私たちは、たどり着いた新しい真実を広めていきます。世界のたくさんの人々に、もちろん子供たちにも。真実をつかみ、それをみなで楽しみながら受け継いでいくこと。それが、人間にしかできない、人間が決して忘れることのない、人間の最も人間らしい営み、「科学」なのだと、私は信じています。

木星の衛星を観測した惑星研究者たちや、進化理論を確立していったチャールズ・ダーウィンや、地動説のために戦ったガリレオ・ガリレイ。こうした科学者たちの足跡を見つめながら、私は毎日をおすごしてきました。いつからか自分の研究分野は動物の解剖学に定まりました。でも、私の生涯は、常に、あらゆることを知りたいというわくわくする気持ち、「好奇心」とともにあります。小学生、中学生、十代二十代のときに育んだ好奇心を支えに、私は今日も科学者を生きています。

学校あるある

学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

伊藤ハムスター

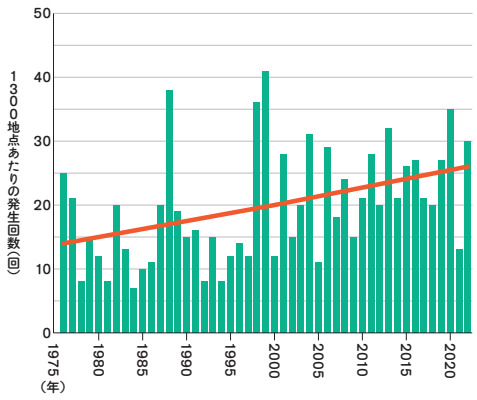


第三回!



伊藤ハムスター イラストレーター。多摩美術大学油絵科卒業。「こども六法」などのイラストを担当。著書に「ぼくのへや」がある。

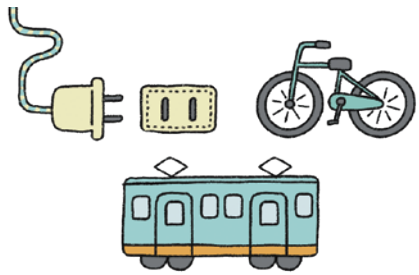
①全国アメダスの1時間降水量 80mm以上の年間発生回数 出典:気象庁



2013年から2022年にかけて、降水量80mm以上の雨の平均年間発生回数は約25回。これを1976年から1985年にかけての平均と比べると、約1.8倍に増えていることになります。気象庁によると、降水量80mm以上の雨は、人によっては息苦しさを感じるほどの激しきこと。もちろん、傘も役に立ちません。
https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/extreme/extreme_p.html

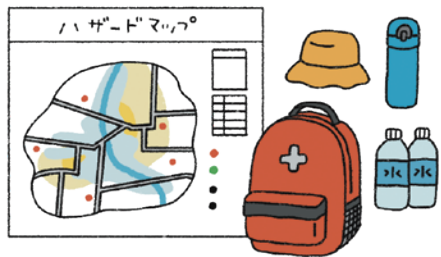
気候変動 今日から私たちにできること

1 | 地球温暖化の進行を「抑える」



二酸化炭素の排出量を抑える取り組みは、温暖化対策の基本。節電や省エネ、交通手段の工夫などは、今日から実践できますね。また、新たな資源とエネルギーの使用を削減するため、このごろはリユース素材を使った製品も手に入れやすくなっています。もちろん、モノを長く使い続けることも立派な対策です。

2 | 環境の変化に「備える」



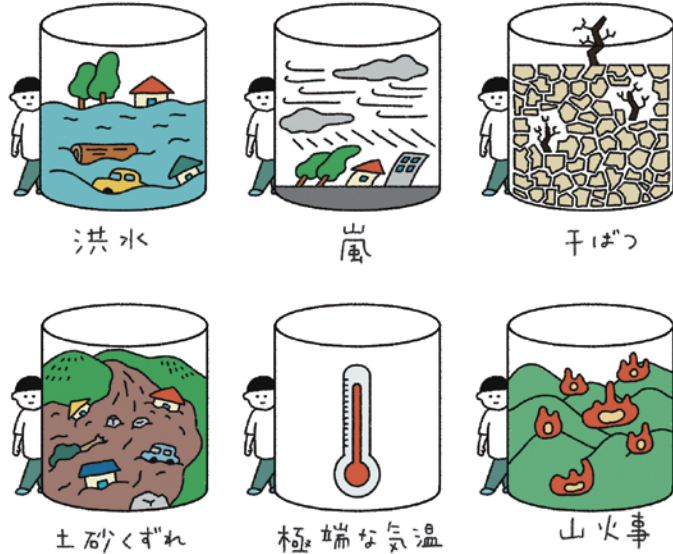
気候変動で変化していく環境への「適応」も求められます。熱中症予防やクールビズなどもそのひとつです。新しい技術や価値観も生まれており、今後は、暑さに強い野菜が開発されたり、これまで農地として利用されていなかった土地で農業が始まったりすることも考えられます。

現在(2010-2019年)の地球

気象災害の件数

3165件

50年前の約5倍!

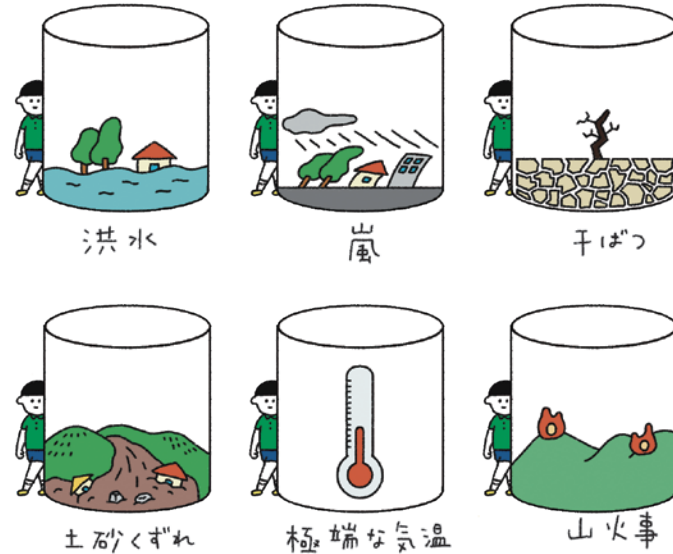


地球温暖化の影響で、気象災害の件数が約5倍に! このままだとさらに増えてしまう。

50年前(1970-1979)の地球

気象災害の件数

711件



洪水、嵐、土砂くずれ……。

1970年代、地球上で711件の気象災害が発生した。

出典:「WMO Atlas of Mortality and Economic Loss from Weather, Climate and Water Extremes (1970-2019)」



「抑える」と「備える」で気候変動に向き合おう!

地球温暖化や都市化の影響で、世界中で長期的に気温が上昇しています。気温がそのまま上がると、熱中症になる人が増えたり、感染症にかかる人が増えたりするだけでなく、水不足などの問題や、洪水や干ばつなどの災害がくり返し起る可能性が地球規模で高まっています。私たちはどのように対応していけばいいのでしょうか?

温室効果ガスが地球をじわじわ暑くする

「夏ってこんなに暑かったっけ?」「今年は冬が短いような……。」季節が変わるたびに、そんな気持ちになりますよね。

「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)の報告書によると、現在の世界の平均気温は、18世紀よりも1.1度ほど上昇しています。さらに、2100年には最大5度上昇するとも。地球上の雪や氷が溶けて海面が上昇したり、夏には猛暑が続く、とてい外を出歩けなくなったりします。

このじわじわと上がる気温について「原因は大気中の温室効果ガスの増加です。」と吉田先生。温室効果ガスには火力発電で電気をつくったり、ガソリンを燃やして自動車を走らせたりするときに出る二酸化炭素も含まれます。私たちが化石燃料を燃やすほど、地球温暖化に拍車がかかるのです。

「IPCCは、2021年の最新の報告書で、人間の生活が温暖化に影響を与えたことに『疑う余地がない』と断定しています。」

極端現象による災害が50年間で5倍に増加

地球温暖化は、猛暑や豪雨などの極端な気象現象(極端現象)が頻発に起こる原因の一つと考えられています。たとえば、1990

が大きくなったり(激甚化)する可能性がさらに高まるのが予測されます。

もはやSDGsの目標13「気候変動に具体的な対策を」は待ったなしの状況なのです。

進行を「抑え」ながらリスクに「備え」暮らし

気候変動への対策には、「緩和」と「適応」の二つがあります。「緩和」とは、地球温暖化の進行を「抑える」行動。節電したり、自転車や公共交通機関を活用したりすることが、二酸化炭素排出量の削減につながります。

これらの対策は今まで広く知られてきましたが、その効果が表れるのにはたいへん時間がかかります。だから、地球温暖化によりすでに起きている、あるいは起きる



国立環境研究所 資源循環領域主任研究員
 よしだあや 吉田綾先生
 ごみ問題やリサイクルの現状を通じて、持続可能なライフスタイルを研究している。

年代以前の日本全国の平均気温を見てみると、最高気温が35度を超える猛暑日は、1年間で1日程度。しかし、この30年の間に、約2.7日まで増えています。

「1時間あたりの降水量が80mmを超える『猛烈な雨』も増えています。2013年から2022年にかけての年間発生回数はおよそ25回。1976年から1985年にかけてのデータと比べると、約1.8倍に増えています。」(図1)

吉田先生は次のように話します。「異常気象や極端現象は、本来、大気の状態や海洋の動きなどの条件が組み合って発生する、地球が持つ自然の変動(ゆらぎ)の一環です。しかし、近年の研究によって、地球温暖化は、猛暑や豪雨の発生頻度を高めていることが分かっています。地球温暖化の傾向が続いた場合、災害の回数が増えたり(頻発化)、規模や範囲

*自治体で配られるほか、国土交通省のハザードマップポータルサイト(<https://disaportal.gsi.go.jp/>)からも情報が得られる。

夢は国語の先生!

ベトナムの文化と言葉を 世界の子どもにも教えたい

世界の友だちは、いつかどんな一日を過ごしているのだろう。日が暮れるまで外で遊んでいる? それとも、放課後は塾で勉強しているのかな? 今回はベトナムの首都・ハノイに住む10歳のアインさんにお話を聞いてみました。



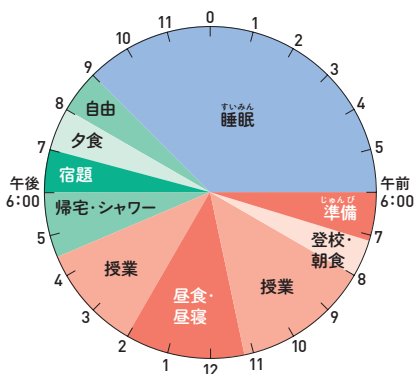
観光スポットとして人気の「ハノイ大聖堂」の前に立つアインさん(写真右)。左は妹のアンさん。

ハノイ市の北東を流れるホン川。その川沿いに家族4人で暮らすアインさんの朝は、とても早い。毎日6時に起きてスクールバスに乘車。7時ごろに学校に到着すると、まずクラスメートといっしょに給食(朝ご飯)を食べるんだ。その後、8時から授業が始まるよ。実はアインさんに限らず、ベトナムの人たちは、みんな早起き。学校だけでなく、店や会社も8時ごろから始まるのが多いんだ。朝食は外で食べるのが一般的で、屋台や食堂は6時ごろにオープンする。交通手段は車よりもバイクが圧倒的に多く、大通りが色とりどりのバイクで埋めつくされて……なんて光景も、アインさんは通学しているんだ。

アインさんは、この9月に5年生になったばかり。ベトナムでは、小学校で5年、中学校で4年、高校では3年間勉強するのが普通なんだ。「去年、学校で「テト」をテーマにした絵画コンクールが開催されて、感動賞をもらいました。とっても、うれしかった!」

テトはベトナムの旧正月(旧暦のお正月)で、ベトナムの人たちが最も楽しみにしている祝日だよ。毎年、1月下旬から2月上旬にかけて10日間ほどの「テト休み」があり、この間、多くの人が帰省して家族といっしょに新年を祝うんだ。街中にはテトソングが流れて、さらびやかな装飾があらこちらに。まるで日本の正月とクリスマスが合わさったかのような盛り上がりなんだ。

週2回教室に通うなど、絵を描くことが大好きなアインさん。将来の夢は、イラストレーター? 「私は国語の先生になりたい! 何か世界の子どもたちにベトナムの言葉と文化を教えたいな。」



アインさんの1日

午前6:00 起床、登校
歯磨き、洗顔をして、6時45分発のスクールバスに乗ります。7時過ぎに学校に着いたら、学校の給食(朝ご飯)を食べます。

午前8:00 授業
授業は午前と午後の2部制で、1つの授業が35分。この日の教科は算数、国語、歴史、美術など。



午前11:15 昼食、昼寝
給食を食べた後、教室を移動し寝袋でお昼寝。ベトナムでは1日授業がある場合、小学生から大学生まで、お昼寝タイムがあります。

午後2:00 授業
午後4:30 帰宅、シャワー
午後6:00 宿題

妹といっしょに宿題をします。



午後7:00 夕食
夕ご飯は家族でいっしょに食べます。この日のメニューは、いつもよりちょっと豪華で「ゆでた豚すね肉」「揚げ春巻き」「牛肉とセリ炒め」「エビフライ」など。ベトナムでは食事を床で食べる家庭とテーブルで食べる家庭が半々ぐらいです。



午後8:00 自由時間
絵を描いたり、テレビを見たり、ブロックで遊んだり。アニメの「ドラえもん」を見ることもあります。



午後9:00 就寝

プロフィール

名前

Nguyen Tuyet Anh
グエントウエットアイン
(小学校5年生・10歳)

好きなこと

スポーツ、水泳、絵を描くこと

好きな教科

体育、国語、美術、音楽

習い事

ダンス

好きな食べ物

お寿司(特にサーモン)

行ってみたい国

日本

地球のために

ふだんやっていること

木を植えること、ゴミ拾いとゴミの分別

将来の夢

国語(ベトナム語)の先生

日本について知っていること

アニメの「ドラえもん」、富士山が大きい!

リラックスタイムは何をしている?

学校の休み時間には、よく友だちとバドミントン进行します。帰宅後は牛乳を飲むのが日課で、飲むと落ち着きます。休みの日には、家族で公園に行ってバドミントンをしたり、散歩をしたり、とっても楽しい時間です!



ハノイ市って、どんなところ?

面積 およそ3,359km²(ハノイ市) /
およそ32万9,241km²(ベトナム)
人口 およそ833万人(ハノイ市) /
およそ9,946万人(ベトナム)

ベトナムの北部に位置する首都。南部の大都市ホーチミンに次いで、2番目に人口が多い。車で東に3時間ほど行くと、世界自然遺産の「ハロン湾」がある。およそ2000もの奇岩や島々の間を縫うように航海するクルーズツアーが人気。



ハノイの街並み。電車や路線バスなどが普及していないため、移動にバイクを利用する人が多い。



ベトナム語の「こんにちは!」
Xin chào (シンチャオ)!
ベトナム語の「ありがとう!」
Cám ơn (カムオン)!

ハノイを漢字で書くと「河内」。川に囲まれた低湿地という意味で、市域は長大な「ホン川」とその支流に囲まれているよ。市内には湖も多く、そのなかでも特に有名なのが「ホアンキエム湖」。周囲には雑貨店やカフェもたくさんあって、外国人からも人気の観光スポットになっているんだ。近くには、130年以上の歴史をもつ「ハノイ大聖堂」もある。かつてベトナムは、フランスが支配していた時代があって、フランスパンを使ったサンドイッチ「バインミー」の屋台や「コーヒー」の専門店も多い。アジアと西洋の文化が融合した街並みがハノイの魅力だよ。

WEB 青いスピンの ご覧ください!



いつでも どこでも 読める
 「青いスピンの」に掲載している読み物は、全て「WEB 青いスピンの」からも読むことができます。

お気に入りのを見つけよう
 過去の号に掲載している作品も読むことができます。関連するおすすめ作品もぜひ読んでみてください。

最新情報をチェック
 「WEB 青いスピンの」にしかないコンテンツや、最新情報を掲載する予定です。

WEB 青いスピンの



(URL: <https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp/>)
 ※インターネットの通信費がかかります。



読者アンケート 第3号の「青いスピンの」でおもしろかった作品や、これから取り上げてほしいことを教えてください。

青いスピンの 第3号
 (2023年 秋)
 2023年9月1日発行

発行者 渡辺能理夫
 発行所 東京書籍株式会社
 印刷・製本 株式会社リーブルテック

ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>
 東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>
 東書WEBショップ <https://shop.tokyo-shoseki.co.jp>

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
 Tel:03-5390-7445 (営業総轄本部) Fax:03-5390-6012
 支社・出張所
 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666
 東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581
 名古屋 052-950-2260 大阪 06-6397-1350
 広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536
 鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084

表紙絵 みなはむ
 アートディレクション 山田和寛(nipponia)
 表紙・本文デザイン 山田和寛+佐々木英子(nipponia)

